

## 《研究ノート》

# 「不滅の連隊」に見る国家と個人 ——現代ロシアのナショナリズムの諸相——

檜和田 拓努\*

The State and the Individual in “The Immortal Regiment”:  
Aspects of Nationalism in Contemporary Russia

HIWADA Takuto

### 要旨

本稿の目的は、現代ロシアにおけるナショナリズムの実態を愛国主義の点から論じることである。ソ連崩壊後、ロシアでは社会主義イデオロギーに代わるナショナル・アイデンティティの模索が行われてきた。そうした中で、近年ロシアでは国民統合の手段として大祖国戦争における勝利を軸にした愛国主義が重視されている。そこでは、政府による上からの働きかけの他に、下からの働きかけとして市民の間で生じたとされる「愛国的」な活動が発生している。

本稿は、この市民間の「愛国的」な活動として始まった「不滅の連隊」に注目する。不滅の連隊は、戦勝記念日に大祖国戦争に従軍した自身らの近親者を記念する活動である。この活動は従来の国家的儀礼に対する反抗活動として注目されているが、実体として活動は国家からの剽窃と支援という、二つの影響を受けながら活動を拡大している。

結論として本稿は、今日の不滅の連隊が活動の理念からかけ離れナショナリズム化しており、それは同時に戦勝という理念が超国家的なものからナショナリズムへと変容していることを示す。

キーワード : ロシア、ナショナリズム、愛国主義、戦勝記念日、不滅の連隊

Keywords : Russia, Nationalism, Patriotism, Victory Day, The Immortal Regiment

### 目次

1. 問題意識
2. 不滅の連隊

---

\*独立研究者

『東北アジア研究』27号(2023年)、85-106頁、doi: <http://doi.org/10.50974/00136710>

© 2023 HIWADA Takuto

本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスの下で提供されています。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



- 2.1. 不滅の連隊の歴史
  - 2.1.1. 戦勝の歴史
  - 2.1.2. 不滅の連隊の登場と展開
- 2.2. 先行研究
  - 2.2.1. 概要
  - 2.2.2. 反抗活動としての不滅の連隊
  - 2.2.3. 活動と国家の関係
  - 2.2.4. ゲオルギーリボンとの類似性
- 2.3. 不滅の連隊の連隊規則
- 2.4. ナショナル・アイデンティティとしての戦勝
- 3. メディア分析
  - 3.1. 調査対象
  - 3.2. 調査概要
  - 3.3. 報道の推移
  - 3.4. 発言の分析
  - 3.5. アンドレイ・ウラソフの排除
- 4. 結論
  - 4.1. 不滅の連隊と国家の相互関係
  - 4.2. 不滅の連隊のナショナリズム化
  - 4.3. ナショナル・アイデンティティとして戦勝は機能するか？

## 1. 問題意識

ソ連崩壊以降、ロシア及び旧ソ連構成国ではイデオロギー転換と共に従来の生活様式の急激な変化が生じた。死にまつわる儀礼においてもそれは例外ではなく、今日までに国内外の研究者によってロシアの死者儀礼の変容について研究が行われてきた。

ソ連時代の葬送から現在までを取り扱った葬送儀礼研究の集大成として、ソコロヴァの研究を挙げることができる。彼女はモスクワ近郊の農村において人類学的研究を行った。彼女の研究において注目すべきなのは、「都市圏において新しい儀礼的様相をもたらす新しい共同性」[Соколова 2013：195]、すなわち新しい儀礼が現在のロシアにおいて生まれつつあることを指摘した点である。人々が能動的に新しい死者儀礼を模索するダイナミズムがロシアにおいて生じているのである。さらに注目すべきことに、この新しい儀礼の兆候は戦死者儀礼という、従来は国家によって独占されてきた領域にも及んでいるという。「ソ連時代、死は個人に帰属せず、国家に帰属していた」[Еремеева 2015：45]と言われるほどに、ロシアでは国家による戦死者儀礼への統制が歴史的に行われてきた。しかし近年、この領域では「ロシアにおいて死について語る権利

をめぐる闘争を試みる人々が出現している」[Еремеева 2015 : 48]と指摘されている。

そもそも、戦死者儀礼と国家は密接な関係にある。これまでネイションとしての国家と戦死者の関係は、ナショナリズムを巡る問題の一つとして提示されてきた。例えば大澤はネイションの条件の一つに、直接の面識関係やその集積をはるかに超えたコミュニケーションの範囲を覆った政治的共同体であることを挙げている。また彼は近代の戦争をナショナリズムの視点から考察し、この戦争の特徴として自国のために死ぬことを受け入れた何百万人も兵士がいたことを挙げている[大澤 2014 : 19]。このように、あるネイションに属する人々が命懸けの同胞意識を持つに至った時、国家と戦死者の関係がナショナリズムの問題として浮き彫りになる。実際の面識がない他者をネイションのメンバーとして認めるというナショナリズムの特徴は、本稿において重要である。そして、国家という枠組みにおいて戦死した国民に国家はいかに対処するのかという点で、戦死者儀礼研究はナショナリズム研究となる。

さて、近年ロシアにおいて出現した戦死者儀礼として、「不滅の連隊」(Бессмертный полк)が挙げられる。この活動は「それぞれの家族における大祖国戦争についての個人的な記憶の保存を目的」[Бессмертный полк - Устав полка]としている。ここに出てくる「大祖国戦争」(Великая Отечественная война)とは、ロシアにおいて第二次世界大戦の独ソ戦を指す言葉である。毎年大祖国戦争の戦勝記念日である 5 月 9 日になると活動の参加者達は各々の街で従軍した近親者の肖像を掲げてパレードを行う[Известия 2016/5/5]。2012 年に始まったこの活動は今やロシアにとどまらず、世界中で行われるようになっていく。今日のロシアではこの活動は戦勝記念日の主要なイベントの一つとして認知されるまでに至っている。

不滅の連隊は活動の急速な拡大という点の他に、活動が民間のイニシアチブによって形成された点が注目されている。この特徴ゆえに、活動は従来ロシアにおける戦死者儀礼とは一線を画したものとして注目されている。しかしこの特徴ゆえに活動は国家による干渉を受けていると言われている。ここに、活動と国家の間のせめぎ合いが存在する。

本稿の目的は、従来国家によって管理されてきた戦死者儀礼の空間において不滅の連隊がいかなる立場を占めているのか、つまりナショナリズムという枠組みにおいて不滅の連隊がいかに位置づけられるのかを明らかにすることである。方法論としては、文献調査を主軸としつつ、メディア分析を用いる。研究領域としてはロシア地域研究に位置づけられるとともに、死者儀礼を扱う宗教人類学的研究に位置づけられる。

## 2. 不滅の連隊

### 2.1. 不滅の連隊の歴史

#### 2.1.1. 戦勝の歴史

まず、本節では不滅の連隊がその背景として持つロシアの戦死者儀礼の歴史を概説する。ロシア・ソ連における戦死者儀礼を語るうえで重要な語句として、「戦勝」(победа)を挙げるのがで

きる。この語句は歴史的には第二次世界大戦における勝利を指し、今日的な文脈においてはこの勝利に対する記念行為を指す。第二次大戦における独ソ戦、すなわち大祖国戦争は、ロシア国民にとって「重要な歴史的偉業」[西山 2018：109]として今日まで認知されている。この戦争における勝利を指す戦勝は、今日では戦死者を記念・追悼する儀礼的側面と共に、ソ連崩壊後の社会主義思想にとってかわる新たなナショナル・アイデンティティとして国家によって重視されている。以下では、戦勝という概念の変遷をたどる。

1941年に始まり1945年に終結した独ソ戦、すなわち大祖国戦争でソビエト連邦は軍民に多くの死者・行方不明者を出した。多くの死者を出しながらも最終的には勝利したソビエト連邦政府は祖国に尽くし勝利をもたらした軍人らに数々の勲章を授け、「英雄として扱った」[西山 2018：109]。大祖国戦争における勝利はソ連における輝かしい功績の一つとして称揚された。

それゆえに終戦後、「西側」との緩衝地帯として、新たにソ連の覇権が及んだ中欧では、1950年ごろまでに、スターリン像建立とともに、「解放」の記念碑や赤軍兵士墓が整備された」[前田 2015：155]。そして毎年5月9日の戦勝記念日には「ソ連への感謝と忠誠を表現するセレモニーが行われていた」[Габович 2015]。しかし当のロシア国内では、「戦勝記念碑建立の計画は他ならぬスターリンによって差し止め」[前田 2015：157]られた。なぜならば、「勝利の栄光はスターリンに帰すべきもの」[半谷 2019：193]とされたからである。

しかしスターリンの死後、「1956年のフルシチョフによるスターリン批判によって状況は一変」[前田 2015：155]した。この年の戦勝十周年記念式典では、「国民が勝利に貢献したことを強調し、戦勝とスターリンを切り離した」[西山 2018：112]演出が行われた。このように、スターリン死後のソ連社会ではスターリンの戦勝から国民の戦勝へと「ナショナル・アイデンティティの拠り所が転換」[前田 2015：155]したことで、独ソ戦での戦勝は国家及び国民全体にとって重要な意味を有するようになったのである。

ここでいうナショナル・アイデンティティとしての戦勝とは、国民統合の手段としての戦勝を指す。この傾向は特に、「現実権力の必要のため、アイデンティティの使用の必要性が本質的に高まった」[ストレリツォフ 2016：109]と言われるブレジネフ時代に増大した。戦勝の国民統合としての側面を示すものとして、1985年のゴルバチョフの発言を挙げることができる。彼は「大祖国戦争における「ソビエト国民の大衆的な英雄的精神を賛美」し、戦勝によってもたらされた「繁栄は諸民族を有機的に接近させた」[デューク 1995：21]と主張している。このように、戦勝は戦後20年を経て国家によって国民統合の手段として重視されたのである。

その後のソ連崩壊は共産主義というイデオロギーのみならず、戦勝に対する評価も一変させた。クーリラは、1990年代初頭に「戦争文化」のロシアにおける後退」[Курилла 2018：1]が生じたと述べている。旧ソ連構成国やその周辺国に建設された記念碑も「後退」に巻き込まれた。ソ連崩壊後に独立した各国において、多くの記念碑は経済的、政治的判断によって解体された[РИА 2012]。それに対して、ロシア国内ではこの衰退の中でも戦勝が比較的残存した。なぜならば、前田によれば、ソ連崩壊時に社会主義イデオロギーが排除された一方で戦争文化が相対的に残っ

たことで、唯一のナショナル・ヒストリーとしての戦争の記憶が公共空間に君臨する状態が生まれたからである[前田 2015: 156]。このように、ロシアとその周辺国の間ではソ連崩壊を機に戦勝の重要度に違いが見られるようになった。いずれにせよ、この時期にイデオロギーとともに戦争文化も衰退したのである。

その後、戦争文化を含むあらゆるソビエト的価値観の衰退は、ロシア国内で人々に新たな歴史の再構築を促した。「1990年代に特徴的なものであった過去への皮肉的で距離を置いた態度に人々は疲弊していた。そこで歴史を積極的な見方において再構築する欲求が芽生えた」[Малахов 2018]とマラホフが語るように、ソ連崩壊後の衰退の反動として過去を肯定的に捉えようとする見方が人々の間に生まれた。ここに、戦勝を軸とする戦争文化の復興が生じた。例えば、戦勝パレードは1995年に縮小された形で復活した[Курилла 2018: 2]。しかしこの「復興」は、元ある形に戦争文化が回帰したことを意味しない。以前の戦勝文化との相違点としては以下の2点を挙げることができる。第1に、今日では戦争文化には従来の大祖国戦争における勝利に加えて多様な意味が込められている。文化人類学者(культуролог)であるエリストラトフは、インタビューにおいて、戦勝を解放という言葉で表現し、次のように述べている。「解放——これは「ナチズム」からの解放のみを意味しない。今日、大祖国戦争の戦勝と解放のアイデアはより広い意味においての解放を意味するようになっている」[Гранцева и Мелихов 2015]。第2に、実際に戦争を経験した兵士たちの減少によって従来への儀礼の維持はもはや困難となった。大祖国戦争から半世紀以上がたち、戦争を実際に経験した人々の数は次第に減少していった。「以前は退役軍人がいた祝日のその場所には、著しい穴が開いていた」[Курилла 2018: 2]のである。このような欠落は、戦勝記念日の重要度の低下をもたらした。「これらの人々の避けがたい絶え間ない死と共に、この祝祭の本質的で重要な意味も年々失われ」[Губский 2012: 58]たのである。そのために、「何かこの空虚さを埋める手段」[Юдина 2016: 87]が求められた。そこに現れたのが、不滅の連隊である。

### 2.1.2. 不滅の連隊の登場と展開

不滅の連隊は、「退役軍人の世代がまばらになり、彼らの再会が戦勝記念日の祝祭の意義と象徴の中心として存在することを止めた時に、生じた」[Курилла 2018: 1]とされる。戦後間もないころに存在した多くの従軍経験者は、戦勝記念日の中心に添えられていた。その彼らが年を経るとともに減少していき、戦勝記念日の中心に空白が生じた。このような「空虚さを埋める手段」として2007年に「チュメニの退役軍人であるゲンナディー・イヴァノフは同胞たちに退役軍人たちの肖像と共に町中を練り歩くことを呼び掛けた」[Курилла 2018: 3]。ただし、これは当時まだ不滅の連隊という名称を与えられていなかった。活動範囲もチュメニにとどまるものであった。

不滅の連隊という名称での活動の全国への拡大は2012年にトムスクのテレビ局 TB2 のジャーナリストであったイーゴリ・ドミトリエフを始めとした数人のグループによって成し遂げられた[Курилла 2018: 3]。このトムスクでの最初の不滅の連隊に「6000人のトムスクの市民が協力」[Юдина 2016: 86]した。ドミトリエフは次のように語る。「もし彼らの子孫が自身の戦死者や戦

後に死んだ兵士の写真を取り出し、ポートレイトと共にメモリアル会場へ行くのならば、死者は再び同じ列に加わり、再び永遠の火へと進みだす」[Губский 2013 : 78]。毎年、彼らの戦勝を称えることが不滅へつながるのという理念の下、活動は組織された。

チュメニで行われた初めての活動の後、「不滅の連隊は国中を飛び回り、大変な興味を引き起こし」[Курилла 2018 : 4]た。活動は、「社会的な、非商業的な、非政治的な、非国家的な民間のイニシアチブ」[Губский 2012 : 60]として評価された。その後活動は「ロシアならず全世界にて動員したところのまさに市民的なイニシアチブ」[Курилла 2018 : 5]となるまでに拡大した。このような活動の拡大に際して重要な役割を担ったのは、各地域のコーディネーターである。各地域の活動は、トムスクの主催者を中心としたネットワークを通して、各地域のジャーナリストによって各個に組織された[Prokopyeva 2017]。

活動はその拡大の過程で国家による支援を受けたとクーリラは述べている。2014年5月に活動は全ロシア委員会「勝利」からの援助を手に入れた。さらに、2015年の大祖国戦争戦勝記念全ロシアプログラムに組み込まれることで、不滅の連隊は戦勝記念日と公的に結びつけられた[Курилла 2018 : 4]。このように、活動は国家的な儀礼の場である戦勝記念日に浸透し、存在感を強くしていった。

他方で、国家による支援は干渉を引き起こしたとクーリラは述べている。2014年には組織内にて内紛が生じ、結果として2013年にモスクワで行われた活動の発起人であるニコライ・ゼムツォフが活動から排除された。活動からの排除に対抗してゼムツォフが翌年2014年に類似の組織である「不滅の連隊・モスクワ」を立ち上げたことで活動は分裂した。その後、モスクワで2015年5月9日に行われた活動では「不滅の連隊」ではなく「不滅の連隊・モスクワ」が主体となって活動が行われ、この活動にロシアのプーチン大統領も従軍経験者である父親の肖像と共に参加した。さらにこの分裂騒動の後、テレビ局 ТВ2 は政府が関心を寄せる歴史的な政治問題に口出ししたために政府の指示で閉鎖された[Курилла 2018 : 7]。

この2014年に排除されたニコライ・ゼムツォフは元々地方議会の議員であり、この年にモスクワにおける活動のコーディネーターとなっただけであった。2016年には彼は連邦下院議会の議員に選出されている[Земцов]。彼の立場を考慮すると、活動は政治家の手によって分裂に至ったと見ることができる。他方で、国家による金銭的支援は分裂した二つの団体双方に対して実施されている。加えて、分裂した団体は活動の実施においては反目することなく、むしろ協力しあっていることが確認されている。「二つの二者択一的な組織はそれでもなお開かれた内紛を避け、できるかぎりその年の主要な事業——不滅の連隊の行進——の遂行における協力をしている」[Курилла 2018 : 5]とクーリラが指摘しているように、上記の分裂騒動は双方において活動を妨げる結果とはならなかった。

## 2.2. 先行研究

### 2.2.1. 概要

不滅の連隊に言及した初期の研究としては、グブスキイのものが挙げられる。彼は、市民社会の概念を用いて不滅の連隊を説明することを試みた[Губский 2012]。

彼の研究の後、特に活動が拡大した 2015 年以降、不滅の連隊を対象とした研究が多数発表された。その一人であるニソヴァは、社会運動としての不滅の連隊とゲオルギーリボンの類似点を論じている[Нисова 2015a]。また、その類似点をもとに活動がいかにして拡大したのかを論じている[Нисова 2015b]。またガボヴィッチは戦勝記念日の地域差に注目することで祝祭の多義性を主張するとともに、近年戦勝記念日にみられる個人化の傾向について論じている[Габович 2015]。また、彼は不滅の連隊を中央の調整組織の存在しない活動である模倣活動(соруцат)と称し、従来ロシアにおいて見られた市民活動としての草の根活動と区別した[Gabowitsch 2018]。ラゼブナヤは、不滅の連隊が大祖国戦争における戦勝という価値観を基軸にしているとした上で、それを状況的団結の側面から説明している[Лазебная 2016]。ユジナは活動が未来の世代の社会化の手段として利用されているとした上で、2016 年にクリミアで生じた事例をもとに、その象徴性を論じた[Юдина 2016]。クーリラは不滅の連隊についてその展開を概説するとともに国家との関係について論じ、近年政府がナショナル・アイデンティティの探索において戦勝を注視していると主張した[Курилла 2018]。

以下では本稿において特に注目する論点について説明する。

### 2.2.2. 反抗活動としての不滅の連隊

エレメエヴァによれば、ソ連時代のロシアでは徹底した死の統一的管理が行われていたという。そこでは権力の命令による死は非個性化された。何故ならば、そこでは死は個人に帰属せず、国家に帰属していたからである[Еремеева 2015 : 45]。不滅の連隊は、このような国家による統一的管理への反抗として評価されている。例えばクーリラは、活動を政権によって独占された戦争の歴史を奪還する試み、また戦争の歴史を家族の歴史として確信しようとする試みと表現している。規則にあるように、不滅の連隊は家族の記憶という非常に個人的な歴史を対象としている。それは各々の家族によっては身近なものであり、同時にそれは国家の語り口とは異なる見方で過去を語る。すなわち、それぞれの家族にとって大祖国戦争の記憶とは家族的な歴史であり、誇りの対象であり、悲劇の記憶なのである。クーリラはこの活動が家族の記憶に軸をおくことで過去の戦争の解釈を国家が独占している状態を破壊したとして評価している[Курилла 2018 : 9]。

ただし、活動は国家による戦争の歴史を否定しようとするものではない。「戦争は国家的なものであるのみならず、彼ら個人的な家族の記憶でもある」[Курилла 2018 : 7]と言われるように、活動は従来の戦争の記憶を国家が独占している状態から国家と市民の両方の記憶へと拡大させたという点で評価されている。

### 2.2.3. 活動と国家の関係

さて、上述のように不滅の連隊は国家に対する一種の抗議活動として評価されているが、他方で国家による干渉も行われている。2.1. 不滅の連隊の歴史で見えてきたように活動は分裂し、一部は国家と密接に結びついた状態にあることはその証左である。クーリラはこれを、国家による「剽窃」(присвоить) [Курилла 2018 : 7] と評している。またレウトが「大衆的なイニシアチブを「妨害」する情熱とそれを官僚化する熱情」[Реут 2016] が活動において生じていると述べているように、国家による活動への干渉は、活動自体を国家の所有するものへと転じさせることにある。

国家が活動に干渉する理由としてクーリラは、「大祖国戦争の歴史がポストソビエト・ロシアにおいて、統合の実際の「かなめ」として成立」[Курилла 2018 : 7] していることを挙げている。国家によって大祖国戦争における勝利はナショナル・アイデンティティとして重視されており、それゆえに大祖国戦争を主題とする活動は国家による干渉が加えられているのである。

しかし、不滅の連隊と国家の関係は、剽窃という一方的なものではない。実際、不滅の連隊では「地方自治体やその他の強力な機関との協力の必要性が最初から認められて」[Gabowitsch 2018 : 308] おり、活動は政府による支援を当初から受けていた。先述の通り 2014 年には活動は全ロシア委員会「勝利」からの援助を受け、2015 年に大祖国戦争戦勝記念全ロシアプログラムに活動が組み込まれたことは、活動が戦勝記念日の一部として公的に認められたことを示している。このように活動が公的な支援を受けることができた理由としてマラホフは、活動において国家と社会のそれぞれの願望の一致が生じたことを挙げている。この願望とは、国家にとっては社会的団結、国民統合であり、活動にとっては下からの統合を意味した。活動の拡大には国家による援助が不可欠であったとマラホフは主張している [Малахов 2018]。

さらに、活動が戦勝記念日の公的な空間に浸透したことで、国家の側が公式行事をこの新しい形式に合わせることを余儀なくされたとガボヴィッチが述べているように [Gabowitsch 2018 : 310]、活動から国家への影響もそこには存在する。

このように不滅の連隊は国家による剽窃と支援を受けている。活動は国家からの支援によって活動を拡大し、従来は国家が独占してきた戦勝記念日の空間に入り込むことに成功した一方で、活動の分裂やテレビ局の閉鎖といった国家による干渉を受けているのである。

### 2.2.4. ゲオルギーリボンとの類似性

上述のように、不滅の連隊は国家から時に干渉され、時に支援を受けながら規模を拡大させていった。実はこのように活動が「地元主導から政府公認のプログラムへと発展したことは、ロシアの戦争記念の伝統における長年のパターンを踏襲している」[Gabowitsch 2018 : 309] と言われている。

その理由としては、しばしば活動に類似する事例であるゲオルギーリボンの活動が挙げられる。この活動は 2005 年にモスクワのジャーナリストによって考案された、大祖国戦争の記憶の象徴である [Gabowitsch 2018 : 310]。ニソヴァは、不滅の連隊とゲオルギーリボンの類似点につ

いて、第 1 に活動の戦勝記念日に関連した歴史的な文脈を、第 2 に活動の非商業的、非政治的、非国家的性質、第 3 に両面的な大衆的伝達媒体としての、社会的制度の間での仲介人としてのマスメディアのイニシアチブを挙げている [Нисова 2015a : 20]。

ガボヴィッチによればこのリボンは当初、愛国心と戦争の犠牲を表す包括的で超民族的、超国家的なシンボルであり、ソビエトの記念式典の伝統を拡大し、革命前の要素を含むことを意図したものであった。つまり、リボンは国家という枠組みを超えた象徴として発明された。しかしそれはその後現在のロシア国家への忠誠心と結びつき、ロシア国外のロシア語を話す少数民族のための忠誠の証となったと言われている。この為にウクライナではゲオルギーリボンの使用はソビエト的シンボルとして禁止されている。リボンは本来の意図から外れ、ロシアという一つの国家への忠誠のシンボルとなってしまったのである [Gabowitsch 2018 : 310]。

このようにロシアでは、当初は超国家的な戦勝の象徴として生み出された活動がその後、国家による干渉を経て国家という枠組みに押し込められ、ナショナリズム化するという流れがしばしば見られる。このような傾向がみられる理由としてガボヴィッチは、これまでの戦勝に関わる活動が「国家によってあらかじめフォーマット化されたレパートリー」[Gabowitsch 2018 : 310]を使用していることを挙げている。例えばゲオルギーリボンは帝政期に存在した勲章がモチーフとなっている。不滅の連隊についてもある種の「レパートリー」が見られる。活動は「軍国主義を否定しているにもかかわらず、その名前やパレードのような振り付けからウェブサイトに至るまで、日常的に軍国主義的な儀式や慣用語、イメージを使用」[Gabowitsch 2018 : 310]している。実際に活動のホームページを見ると、そこには「連隊本部」、「軍事刑務所」、「情報局」、「営倉」といった軍事組織に倣った見出しが連なっている。このように、活動が戦勝を主題とする以上、その途上において国家的モチーフを使用せざるを得ないという状況があり、そのために多くの活動は国家による接近を許してしまうのである。

### 2.3. 不滅の連隊の連隊規則

活動団体のサイトには連隊規則 (Устав полка) という名の活動規則が掲載されている。このサイトによれば、この連隊規則は活動が不滅の連隊という名で初めて行われた 2012 年に制定されたものである。連隊規則は活動を以下のように説明している。

1. 不滅の連隊はそれぞれの家族における大祖国戦争についての個人的な記憶の保存を目的とする。
2. 不滅の連隊への参加には、自身の近親者・陸海軍及びパルチザンの元兵士たち・地下活動家・抵抗運動の戦士・銃後の担い手・収容所の囚人・包囲者・戦時の子供たちを回想し敬う人々が、彼・彼女の肖像写真、もし写真が無ければ彼らの名前を書いたものを手に、不滅の連隊に参加し、あるいは肖像写真と共に個人的に記憶の贈り物をするために、5月9日に永遠の炎や他の記念の場に赴くことを趣旨とする。不滅の連隊への参加は完

全に自主的なものである。

3. 不滅の連隊は非商業的、非政治的、非国家的な民間のイニシアチブである。連隊の隊列には信仰や国籍、政治的信条また他の属性に関わらず、すべての市民が参加することができる。不滅の連隊は人々をつなげる。他の目的を持つ人々はふさわしくない。一つの国に、一つの連隊を。
4. 不滅の連隊は広告にはならない。不滅の連隊に関連する全てのものに、企業、政治、その他の象徴を使用することはできない。
5. 例え政治的、社会的な偉業(歴史的なものも含む)において非常に敬うべき人間であっても、連隊はその一人の為に行われることは無い。連隊は、数百万の死者とその子孫のためのものである。
6. 5月9日の連隊の行進の実行の主権と協力には不滅の連隊本部が従事する。この本部には2012年5月9日の民間イニシアチブの主催者と共に、言うまでもなく連隊規則を遵守し自身の町で連隊の主権者となる意思を有する団体と市民が組み込まれる。
7. 連隊規則の保持と論争の解決、市民イニシアチブのそれぞれの町の集合的な意思の表出の為に、公開された連隊の評議会を組織する。連隊規則に倣って自身の地域で不滅の連隊を行った経験を有する全ての主催者たちは自身の希望を表明するためにこの評議会に参加することができる。
8. 連隊規則の変更と追加は連隊公開評議会に参加した町の多数決によって決定される。
9. 私たちの最終的な目標は、不滅の連隊を5月9日の戦勝記念日を全国民的伝統にすることである[Бессмертный полк - Устав полка]。

上記の資料から活動の特色を3点のべる。

第1に、不滅の連隊は国家と距離を置くことを理念としている。項目3にあるように、活動は「非商業的、非政治的、非国家的な民間のイニシアチブ」であることが強調されている。今日不滅の連隊が注目されている理由の一つとしてこの官製ではない、民間の活動である点が挙げられる。

第2に、不滅の連隊は理念としてロシア一国に留まらない、より広い連帯を呼び掛けている。項目3にあるように、この活動への参加に国籍は問われない。ただ、大祖国戦争に関わった人々の記憶を保存するというその点において人々は参加する資格を持つ。また、項目6、8にあるようにこの活動はその活動の基幹単位として自治体を採用しており、活動に関わる会議において行われる投票の単位はこの自治体となっている。このように、不滅の連隊は大祖国戦争の記憶を超国家的に共有することを理念としているのである。

第3に、不滅の連隊はその組織構成に「非階層的」特徴を持つ。項目6にあるように、活動各地域の「不滅の連隊本部」が中心となって行うこととなっている。ただし、この本部は項目7に記載のある評議会がコーディネーターを派遣するのではなく、あくまでも各地域の希望者がコーディネ

ネーターとして各々の活動を組織することとなっている。このサイトには「どうやってコーディネーターになるのか」という名のページが存在する。そこでは、連隊規則を遵守する限りあらゆる市民がコーディネーターとなることができると記載されている[Бессмертный полк - Как стать...]。各地域の希望者が任意にコーディネーターとなるという構図は、前節で述べたとおり活動の初期から一貫している。このような構図からガボヴィッチは活動の特徴として「非階層的」[Gabowitsch 2018 : 298]である点を挙げている。

#### 2.4. ナショナル・アイデンティティとしての戦勝

大祖国戦争における戦勝が国民統合の手段としてソ連時代から国家に注目されてきたこと、そしてこの手段として利用されるがゆえに戦勝を主題とした活動がしばしば剽窃されてきたことは上述のとおりである。それは今日も変わらない。ガボヴィッチは、ロシア政府が自身を戦勝の遺産の管理者とみなしており、戦勝の記憶を今日のロシアに結び付けていると主張している[Габович 2015]。クーリラはまた、近年政府がナショナル・アイデンティティの模索において国家が戦勝を現代ロシアの「建国神話」として注視しており、そのため大祖国戦争のナラティブは制御を試みられていると主張している[Курилла 2018 : 2]。ここでは、ナショナル・アイデンティティとしての戦勝の今日における実態を述べる。

西山は、ソ連崩壊に伴ってロシア国内で生じたナショナル・アイデンティティをめぐる問題として以下の2点を挙げている。第1にそれは、ロシアでは国内の多様な諸民族をいかに包摂するのかという民族問題であり、第2にソ連としての国家のアイデンティティの喪失に伴うロシアという国家としてのナショナル・アイデンティティの再定義の問題である。西山はこの二つの問題に対して国家が大祖国戦争における勝利、すなわち戦勝に着目したと主張している。戦勝を主軸とした愛国主義は、共産主義に代わって異なる民族を包摂し、ロシアの再興の基礎となり得る新たな統合概念、すなわち国民統合の手段として国家によって注目された[西山 2018 : 4]。

ここで注意しなければならないのは、戦勝はロシアという国家にのみに帰するものではないという点である。そもそも戦勝はソ連という国家に帰されていたものであり、それはソ連を構成した全ての国が継承している。ソ連が崩壊し多くの構成国が独立した今日においては、戦勝とは超国家的な理念なのである。このことは、ロシア政府自身が認めている。例えば、近年プーチンは戦勝パレードの演説において次のように語っている。「親愛なる友人諸君、今日大祖国戦争の兵士たちは様々な国で生活している。しかし彼らの、野蛮人の破壊や抑圧から人々を救済したという、共同の偉大なる勲功を分離することはできない」[Путин 2020]。ニソヴァも戦勝記念日についてこの日は今日のロシアの住民を団結させ、また第二次世界大戦の参加国を団結させる祝祭の中でも最も著名な日として認識されていると指摘している[Нисова 2015a : 20]。このように、戦勝は国境を越えた連帯を創り出す、超国家的側面を有する。従って、ロシアにおいて戦勝記念日は現在、国内的には国民統合に資すると同時に、対外的な観点から、旧ソ連諸国を繋ぐ唯一無二の接点として認識されていると言える。

ただし、戦勝という概念への旧ソ連加盟国とその周辺国の評価は種々多様である。「もしロシアにとってソ連の崩壊がトラウマ的な物であれば、かつての主権を持った政治的単位へと変化したソ連構成国にとって、これは新たな始まりであった」[Малахов 2018]と言われるが、旧ソ連構成国及びその周辺国において戦勝はソ連というかつての国家をいかに評価するかという問題と直結しているのである。ソ連崩壊に伴う自国の独立を「解放」と捉える諸国において、戦勝は自らを抑圧してきたソ連という国家の行為として批判されるか、あるいはソ連という国家と切り離して単に自民族の戦いとして評価するかに分かれている。特に、戦勝記念日に対する各国の態度の違いはその傾向を如実に示している。例えばウクライナでは、戦勝記念日自体をロシアとは別の日に移すという試みが行われている。戦勝記念日を5月9日から西欧で式典が行われている5月8日に移すことは、ソ連の歴史の枠組みから西側の歴史の枠組みへと戦勝の記憶を移行することを意味するとメディアは伝えている[Известия 2018/5/9a]。

したがって、「多くのポストソビエト諸国はこの日を原則的にロシアにおいて受容されている形の歴史的コンテキストにおいて受容することを拒否している」[Малахов 2018]とマラホフが言うように、旧ソ連諸国を繋ぐ唯一無二の接点という戦勝の側面は周辺国において共有されているとは言い難い。むしろ、各国においてそれぞれが独自の戦勝観を有し、それが国内では広く共有されるとともに、国外では対立の火種となっているのが現状であると言える。

### 3. メディア分析

#### 3.1. 調査対象

本節では、メディアを用いて不滅の連隊を調査する。

ロシアのイズベスチヤ紙をもとに、不滅の連隊をキーワードとして抽出した記事を対象に悉皆調査を行った。報道の内、特に不滅の連隊に関する発言を抽出し、その内容に注目した。

本稿において上記の調査方法を用いる理由は以下の2点である。第1に、不滅の連隊はその活動を拡大する過程においてSNSや出版などのメディアを重用したからである。最初の活動とされるトムスクでの不滅の連隊の発起人がテレビ局の職員であったことから、不滅の連隊とメディアの関係は重要である。第2に、不滅の連隊はその活動が始まってからまだ日が浅く、体系的な情報が形成されていないからである。いまだ不明瞭な情報を体系化する過程において常に絶えず新しい情報が行進されていくメディアを分析手段として用いることは、この不滅の連隊のような新規性のある情報を捉える上で有用であると言える。

#### 3.2. 調査概要

イズベスチヤ紙の2015年から2020年までの不滅の連隊という語句が含まれる記事をアーカイブより単語検索することで抽出し、それを対象として調査を行った。抽出された記事の数は421に上る。不滅の連隊の活動自体は前述のとおり2012年から始まっているが、2012年から2014

年までの活動については報道が存在しなかったため、2015年から2020年までの、活動が国家によって剽窃されながら大衆化し一般化した期間を対象として分析を行った。

調査に当たっては、報道の主題をもとに7つのカテゴリーに分類した。図1の通りである。分類において最も優先的なカテゴリーは「活動自体についての報道」であり、次いで「事件・衝突に関連した報道」が優先され、さらに「戦勝記念日に関連した報道」が続く形となる。例えば、戦勝記念日に不滅の連隊が行われたことを伝える報道の場合、それは「活動自体についての報道」に分類される。また、戦勝記念日に実施された不滅の連隊が他のデモ隊と衝突したことを伝える報道の場合、その報道の主題を鑑みて「事件・衝突に関連した報道」に分類される。

また、調査した報道の中で活動に関する発言の数は87に上る。抽出においては、各報道において活動の実施や概要といった事務的な発言を除いたものを対象とし、その発言者の属性や態度を分類した。

なお、メディア分析において留意しなければならない点は、第1に一度に伝えることのできる情報量の限界、第2に「記事は一見客観的に見えるがあくまで記者の目を通した内容であり主観も混在している」[坂口 2014: 3]というバイアスの問題である。この点は本稿においても同様であり、この調査法における限界である。

### 3.3. 報道の推移

不滅の連隊に関する報道の年別推移は図1のとおりである。

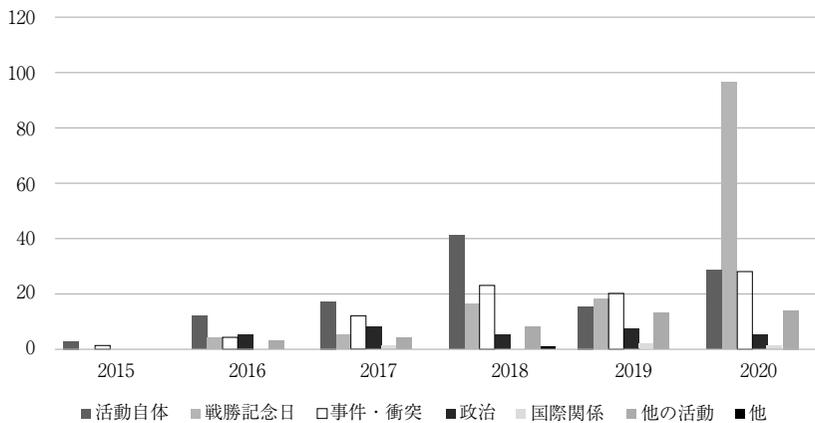


図1 イズベスチヤ紙「不滅の連隊」報道の推移(年別)[筆者作成]

このように、不滅の連隊に関する報道は年々増加している。特に顕著なのは、戦勝記念日を主題とする報道において不滅の連隊に言及する報道が継続的に増加している点である。このことから、戦勝記念日と不滅の連隊が結び付けて報道されていることが分かる。

また、「他の活動」に含まれる、他の類似の活動を主題とする報道においても不滅の連隊への言

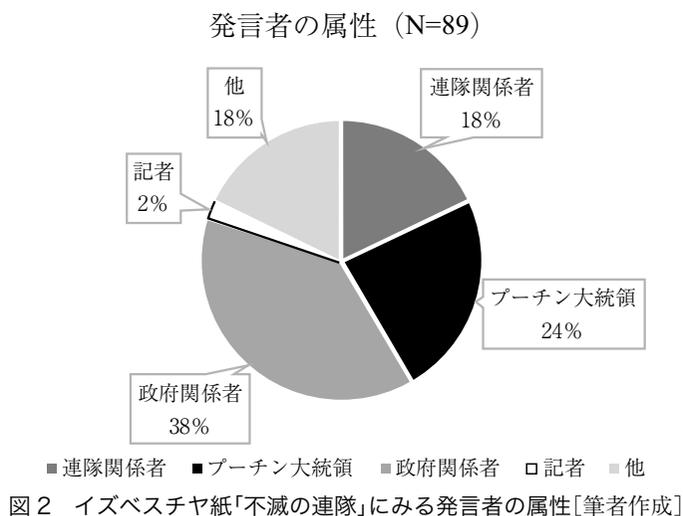
及が年々増加している点も注目に値する。このことから、大祖国戦争に関連した「愛国的」な活動を報道する際に、その最も成功した事例として不滅の連隊を引き合いに出す傾向が存在することが分かる。

さらに、2017年以降事件・衝突に関連した報道が継続的にある程度の数を含んでいる点も注目に値する。その内容の多くはウクライナ問題に関連しており、活動への支持者と反対者との衝突を報道している。例えば2017年5月9日の報道では、ウクライナの都市ハルキウで急進主義者が活動の参加者を攻撃したことが伝えられている[Известия 2017/5/9]。またこのカテゴリーには、後述する「ハイブリッド戦争」のように不滅の連隊をめぐってロシアとウクライナ両国が繰り返している非難の応酬を報道したものもある。ここからは、不滅の連隊が政治的文脈においても重要な論点として存在していることが分かる。

### 3.4. 発言の分析

次に、各報道における発言に注目して分析をしていく。

報道より抽出された発言の数は89である。発言者の属性は図2のとおりである。



このように、半分以上がプーチン大統領や政府関係者によって占められている。なお、この政府関係者というくくりの中には複数の国の政治家が含まれており、彼らの活動への態度は様々である。本稿では特に、この政府関係者の発言に注目して分析をしていく。政府関係者のカテゴリーに属する発言者の数は32であり、その国籍とその態度は図3のとおりである。

## 政府関係者の活動への態度 (N=32)

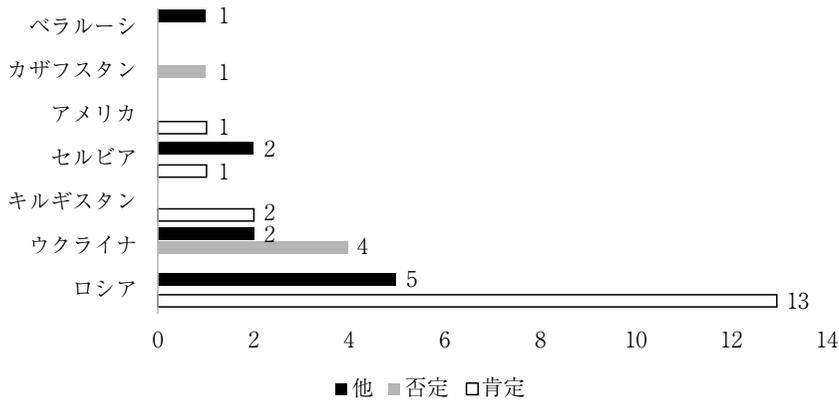


図3 政府関係者の「不滅の連隊」への態度[筆者作成]

このように、政府関係者の内肯定的な発言の大半をロシア側の発言者が占めており、それに対して否定的な発言の大半をウクライナ側の発言者が占めていることが分かる。例えば、ロシア副首相はロシア国民を団結させる要として戦勝記念日を評価する際に団結の一例として不滅の連隊を挙げている[Известия 2017/4/20]。それに対して当時のウクライナの大統領であるポロシェンコは不滅の連隊をロシアによるハイブリッド戦争の一部であると主張し、これを批判している[Известия 2018/5/9b]。このようにポロシェンコが活動を批判する理由としては、紛争地域において活動がロシアへの忠誠心をしめすものとして利用されている点を挙げることができる。例えばウクライナ東部のドネツクでは近年紛争による戦死者を不滅の連隊に加えていることが報道されている[Известия 2018/5/9；ДАЦ 2018/5/9]。この事例は先述のニコライ・ゼムツォフが「ドネツクの連隊の組織者たちに、ウクライナ南東部で現在進行中の紛争で分離主義者として死亡した人たちの肖像画を追加するように勧」[Gabowitsch 2018：309]めたことがきっかけであると考えられる。

加えて、ベラルーシにおける報道も興味深い。2019年3月1日にルカシェンコ大統領は、不滅の連隊のアイデアはベラルーシのものであると主張した[Известия 2019/3/1]。実は、前年の2018年5月8日にミンスクにおいて、翌日に行く予定であった不滅の連隊の活動が市当局によって禁止されるという事件が起きていた。禁止の理由として当局はベラルーシにはすでに類似の行動「ベラルーシは記憶する」が存在することを挙げた[Известия 2018/5/8]。このように、ベラルーシにおいて活動はベラルーシの文脈でナショナリズム化していると言える。

以上のように、発言者の属する国家によって活動に対する発言の態度に顕著な差異が存在する。

### 3.5. アンドレイ・ウラソフの排除

2020年に生じた不滅の連隊に関する事件は戦勝の変容を明確に示す一例となっている。この事件は、2020年5月10日に、不滅の連隊のウェブサイトになチス・ドイツの政府関係者であったヒムラーの写真が投稿されたというものである[Известия 2020/5/10]。5月14日に捜査当局は不滅の連隊のサイトにナチスのメンバーが投稿された件について捜査を開始した[Известия 2020/5/14a]。5月28日にさらに3人の容疑者がナチズムの復興の疑いで告発された。そのうちの一人はアンドレイ・ウラソフの写真に記載したためであると報じられている[Известия 2020/5/28]。5月14日にはロシアにある民間の統計機関によって先の不滅の連隊のサイトの事件についてアンケート調査が行われた[Известия 2020/5/14b]。

この事件をあなたはどのように評価するか？

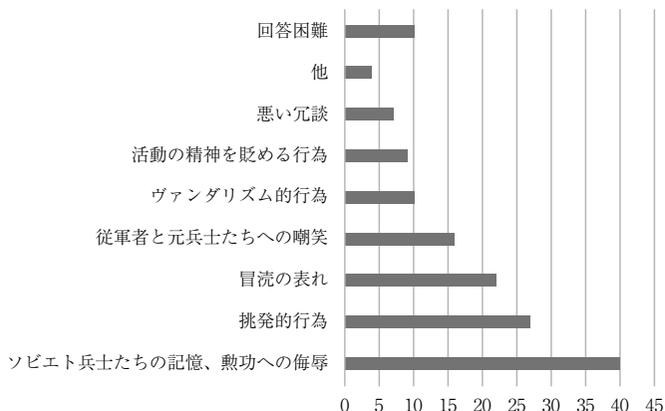


図4 「この事件をあなたはどのように評価するか？」[ВЦИОМ 2020/5/14]

図4の通り、回答した市民の多くが大祖国戦争の歴史への侮辱あるいは挑発とみなしている。このことから、この事件において戦勝の記憶への攻撃が行われたとする認識が市民レベルにおいて共有されていることが分かる。その後2020年5月16日に4名の容疑者の捜査が始まったとの報道がされている。容疑者はいずれもロシア在住であり、またウクライナ人とエストニア人を含む外国人がこの事件に関与していると報じられた[Известия 2020/5/16]。

このように、不滅の連隊における一連の事件はロシア国内において大きな反響を及ぼした。事件は大祖国戦争に従軍した兵士たちへの冒涇と見なされた。また、この事件は連邦法「ナチズムの復興に対する法律」に抵触するものとして捜査が行われた。この法律は2014年に成立したものであり、その内容は以下のとおりである。

ヨーロッパ諸国の主要な戦争犯罪者の捜査と刑罰のための国際軍事法廷の判決によって決定された真実の否定、告知された判決によって決定された諸犯罪へ賛同、また大祖国戦争の

際のソ連の当事者たちについての誤った情報の故意の流布は、300000 ルーブルまでの罰金あるいは有罪者の給料や収入の2年分の罰金によって処する、あるいは3年以内の強制労働、また同様の期間までの自由剥奪刑に処する〔Правительство России 2014〕。

アンドレイ・ウラソフという人物はもともとソ連軍の司令官であり、1941年末のモスクワ防衛線の指揮をとり、レーニン勲章及び赤旗勲章を受章している。しかし、1942年3月に彼はスターリンに対する絶対的不信からドイツ側に投降した。その後はドイツ側で活動を行い、ロシア解放軍総司令官、ロシア諸民族解放委員会議長となった。その後1945年5月、侵攻してきたソ連軍に逮捕され、1947年、ソ連法廷で有罪の判決をうけて絞首刑となった〔トールヴァルト 1978〕。このように、アンドレイ・ウラソフはもともとソ連の将軍として活躍した英雄であったと同時に、その後のドイツ軍へ投降しと対ソ宣伝活動を行ったことで裏切者と見なされている人物である。アンドレイ・ウラソフの写真の投稿が「ナチズムの復興に関する法律」に抵触するものとして捜査されていることから、今日のロシアでは彼は英雄ではなく裏切者として戦勝の枠組みから排除されていることが分かる。

さらに、この事件には続きがある。不滅の連隊における上記の事件の後の7月27日にはモスクワ近郊のドミトロフにあるモスクワ攻防戦の記念碑からウラソフ将軍の名前が削除された、という報道が伝えられている。これは1941年のモスクワ攻防戦を記念して2005年に建設された戦争記念碑に他の将軍と共に記されていたアンドレイ・ウラソフの名前を当局の要請で削除することになったというものである〔Известия 2020/7/27〕。

このアンドレイ・ウラソフの事例は二つのことを示唆している。第1に、誰を英雄とし誰を英雄としないのかという、すなわち戦勝の枠組みが変化しつつあるという点である。アンドレイ・ウラソフの名が記された記念碑は2005年という、戦勝文化の歴史で言うのであればその復興期に建設された。そしてその当時は問題視されなかったアンドレイ・ウラソフの存在が、2020年の不滅の連隊の事件を経て不適切な存在として抹消された。ここに、近年の戦勝文化の復興が次第にある一定の枠組みの中に収斂されている様子がうかがえる。その枠組みとはすなわち、ロシア国家のナショナル・アイデンティティとしての戦勝を指す。ロシアにおいて戦勝はナショナリズム化しつつあるのである。第2に、この戦勝の枠組みとしていかなる範囲が望ましいかという問題に対して活動と国家は歩調を合わせている点である。2020年の事件は偶発的なものではあったが、両者はアンドレイ・ウラソフの存在を戦勝の枠組みから排除するという点において意思が一致していた。活動のみならず、アンケート調査を見る限り、その意思は国民の間でも概ね共有されていたと考えられる。このように、国家がふさわしいと考える戦勝の枠組みは国内において広く共有されているのである。

## 4. 結論

### 4.1. 不滅の連隊と国家の相互関係

不滅の連隊はしばしば国家によって干渉が加えられていることが取り沙汰されている。活動の分裂とその後のテレビ局の閉鎖は、活動に対する国家による公然の圧力であったと言える。このような剽窃は不滅の連隊のみならず、戦勝を主題とした他の活動でも見られた。剽窃を国家が行う理由として、今日国家がナショナル・アイデンティティとして戦勝を用いようとしていることが挙げられる。国家の思い描くナショナル・アイデンティティとしてふさわしい戦勝の枠組みに活動を落とし込もうとする過程で剽窃が生じたのである。また、そこには戦勝という主題がそもそも多分に国家的・歴史的要素を有するものであり、否が応でも国家的モチーフを使用せざるを得ないという事情がある。ゲオルギーリボンしかり、不滅の連隊しかり、戦勝を主題とした活動は国家によって剽窃されているのである。

あわせて、活動は国家からの支援によって今日の地位を獲得している。不滅の連隊は規則において国家と一定の距離を置くことを明記している。ただし、それは完全に国家との接触を遮断することを意味しない。活動は様々な段階に様々な地域で国家による支援を受けてきた。このような支援を受けることができた理由として挙げられるのが、やはりナショナル・アイデンティティとしての戦勝という理念である。マラホフが「願望の一致」[Малахов 2018]と言いつつ表したように、ロシア国内において不滅の連隊と国家は国民統合の為に戦勝を用いるという点で軌を一にしている。ウクライナ情勢が急激に悪化した2022年においてもモスクワで行われた活動にプーチン大統領が参加していることから、活動と国家の連帯は継続していると考えられる[Известия 2022/5/9a]。

このように、活動は戦勝という主題を用いるがゆえに国家によって剽窃されているが、同時にこの戦勝という理念ゆえに国家から支援を得ることができたのである。

### 4.2. 不滅の連隊のナショナリズム化

不滅の連隊の規則にあるように、活動は国境を越えて行われることを理念として掲げている。しかしズベスチャ紙の分析で見られたように、現在の活動は国境によって裁断され、時には活動自体が国家間の論争の的になっている。そして上述の通りロシア国内では国民統合の手段としての戦勝という理念において国家と協力しており、ここでは国境を超えるという理念は後退している。

むしろ国外では、不滅の連隊は熾烈な批判にさらされることも少なくない。ウクライナにおいて活動はハイブリッド戦争の一種として捉えられ、政府に批判されている。ウクライナ東部のドネツクで行われた不滅の連隊は、あたかもゲオルギーリボンの事例のように、ロシアへの帰属意識を示すものとして報道されている。またベラルーシでは不滅の連隊は異なる名前の活動に取って代わられており、ここにはロシア政府と同様にナショナル・アイデンティティとして戦勝を用いようとするベラルーシ政府の思惑が見て取れる。このように活動は、各国家においてさまざま

な思惑の中で評価されている。ここに、戦勝による融合という理念と国境による寸断という実態の間の乖離を見てとることができる。

活動のナショナリズム化は同時に、戦勝のナショナリズム化を示す。戦勝はそもそも、ロシアのみならず旧ソ連構成国及びその周辺国において共有されている共同の歴史であった。しかし今日の不滅の連隊において戦勝はロシアやベラルーシではナショナル・アイデンティティとして、各々の国家の枠組みに閉じ込められている。それゆえに、戦勝が語る歴史もまた各国において個別化している。従って今日の政治的文脈において戦勝は、国家間の親交や共同という対外的側面よりも、国内における自国の歴史と戦勝を一致させようとするナショナリズム的側面が強調されているのである。

このように元々旧ソ連構成国に共有されていた理念である戦勝とこの理念のもとに生まれた不滅の連隊は、今日ではロシアにおけるナショナリズムを代表する活動の一つとみなされるまでに変容している。

#### 4.3. ナショナル・アイデンティティとして戦勝は機能するか？

このように活動は、各国におけるナショナリズムの典型的な要素として存在している。そして国境によって寸断された活動はそのまま国境によって寸断された戦勝という理念に映し出されている。ウクライナ情勢が悪化した 2022 年においてもこの状況は変わっていない。2022 年 5 月 9 日の戦勝記念日に行われた不滅の連隊に関する報道は、ロシアによるウクライナ侵攻の後、ロシア軍によって「解放」された都市で不滅の連隊が行われたことに言及している。そこでは、ロシアの国旗を手に活動が行われた。また「不滅の連隊・ロシア」の共同代表者はウクライナ情勢に言及した中で大祖国戦争におけるナチズムというイデオロギーへの勝利を強調した[Известия 2022/5/9b]。このことは、ロシア政府が言うところの「特別軍事作戦」においてウクライナの「非ナチ化」を目標としていることを彷彿とさせる。このように、昨今の国際情勢下において活動はよりロシアという国家の政治理念に近づいている。

では、戦勝は果たしてナショナル・アイデンティティとして今後機能するのだろうか。アンドレイ・ウラソフの事例は、今日のロシアにおいて戦勝の対象として「ふさわしい」存在が取捨選択されている現状を示している。大澤は、ネイションの内部には「ほとんど必然的に、差別されるマイノリティが生み出されてしまう」[大澤 2014 : 21]と述べている。現在の国家という枠組みが多様な人間の集団を一元的に包括することが不可能であるために、常に国家の内部にはマイノリティが生み出されてしまうのである。戦勝もその例に漏れず、多様な民族を包摂する概念として注目されているものの、そこでは結果的にアンドレイ・ウラソフのような「裏切者」がマイノリティとして新たに排除されてしまう。戦勝という理念が大祖国戦争という過去をいかに評価するのかという問題に直結する限り、このマイノリティの排除という問題は常に存在する。

本稿はひとまず、ソ連崩壊後の旧ソ連構成国それぞれにおける、不滅の連隊のナショナリズム化、戦勝のナショナリズム化を指摘し、終えることとする。

## 引用文献

### ○日本語文献

大澤真幸

- 2014 「ネーション／ナショナリズム」大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎『ナショナリズムとグローバルリズム』、東京：新曜社、14-21 頁。

坂口奈央

- 2014 「新聞記事に見る防潮堤問題の論点整理」『総合政策』16(1)、1-17 頁。

ストレリツォフ・V

- 2016 「戦後のロシアと日本のアイデンティティ」(山脇大、下斗米信夫訳)『京都産業大学世界問題研究所紀要』31、105-117 頁。

デューク・N、カラトニツキー・A

- 1995 『ロシア・ナショナリズムと隠されていた諸民族——ソ連邦解体と民族の解放』(田中克彦監、李守、早稲田みか、大塚隆浩訳)、東京：明石書店。

トールヴァルト・ユルゲン

- 1978 『幻影——ヒトラーの側で戦った赤軍兵たちの物語』(松谷健二訳)、東京：フジ出版社。

西山美久

- 2018 『ロシアの愛国主義——プーチンが進める国民統合』、東京：法政大学出版会。

半谷史郎

- 2019 「1965年5月9日の「黙祷」放送」『スラヴ研究』66、191-204 頁。

前田しほ

- 2015 「スターリングラード攻防戦の記憶をめぐる闘争——象徴空間としての戦争記念碑」『思想』1096、153-170 頁。

### ○英語文献

Gabowitsch, Mischa

- 2018 Are Copycats Subversive?: Strategy-31, the Russian Runs the Immortal Regiment, and the Transformative Potential of Non-Hierarchical Movements. *Problems of Post-Communism* 65(5): 297-314.

Prokopyeva, Svetlana

- 2017 Russia's Immortal Regiment: From Grassroots To "Quasi-Religious Cult." *Radio Free Europe*. (<https://www.rferl.org/a/russia-immortal-regiment-grassroots-to-quasi-religious-cult/28482905.html>) 2022/2/23 最終閲覧

### ○ロシア語文献

Бессмертный полк

Устав полка

(<https://www.moypolk.ru/ustav-polka>) 2022/9/18 最終閲覧

Как стать координатором движения

(<https://www.moypolk.ru/kak-stat-partnerom-polka>) 2022/11/9 最終閲覧

ВЦИОМ НОВОСТИ

2020/5/14 Оскорбление памяти о Великой Отечественной войне

(<https://wciom.ru/index.php?id=236&uid=10279>) 2021/1/27 最終閲覧

Габович, М.

2015 Памятник и праздник: этнография Дня Победы // Не прикосновенный запас 101

([https://www.nlobooks.ru/magazines/neprikosnovennyu\\_zapas/101\\_nz\\_3\\_2015/article/11512/](https://www.nlobooks.ru/magazines/neprikosnovennyu_zapas/101_nz_3_2015/article/11512/)) 2021/1/27 最終閲覧

Гранцева, Н., Мелихов, А.

2015 Победа с нами? // Нева 9: 139-179.

Губский, В. В.

2012 Журналистская инициатива «Бессмертный полк» в аспекте формирования гражданского общества // Журналистский Ежегодник 1: 58-61.

2013 Бессмертный полк далее везде... Журналистская инициатива в аспекте патриотического воспитания. // Журналистский Ежегодник 2: 77-81.

ДАЦ

2018/5/9 Порядка 72 тысяч человек прошли в колонне «Бессмертного полка» 9 мая в центре Донецка (ФОТО) (<https://dan-news.info/obschestvo/poryadka-72-tysyach-chelovek-proshli-v-kolonne-bessmertnogo-polka-9-maya-v-centre-donecka-foto.html>) 2021/1/27 最終閲覧

Еремеева, С.

2015 То, о чём молчим... Почему death studies не популярны в современной России? // Археология русской смерти 1: 33-50.

Известия

- 2016/5/5 День Победы будут праздновать более 60% россиян (<https://iz.ru/Svetlana/612615>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2017/4/20 Рогозин считает День Победы главной скрепой, объединяющей россиян (<https://iz.ru/news/688667>) 2022/2/7 最終閲覧
- 2017/5/9 Радикалы напали на участников «Бессмертного полка» в Харькове (<https://iz.ru/news/702044>) 2022/2/7 最終閲覧
- 2018/5/8 Власти Минска объяснили причину отказа от «Бессмертного полка» (<https://iz.ru/740983/2018-05-08/vlasti-minska-obiasnili-prichinu-otkaza-bessmertnomu-polku>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2018/5/9a Порошенко возложил цветы у Вечного огня в Киеве (<https://iz.ru/741232/2018-05-09/poroshenko-vozzlozhil-tsvety-u-vechnogo-ognia-v-kyieve>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2018/5/9b Порошенко назвал акцию «Бессмертный полк» частью гибридной войны России (<https://iz.ru/741152/2018-05-09/poroshenko-nazval-aktciiu-bessmertnyi-polk-chastiu-gibridnoi-voiny-rossii>) 2022/2/7 最終閲覧
- 2018/5/9 Более 70 тыс. человек приняли участие в шествии «Бессмертный полк» в Донецке (<https://iz.ru/741311/2018-05-09/bolee-70-tys-chelovek-priniali-uchastie-v-shestvii-bessmertnyi-polk-v-donetcke>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2019/3/1 Лукашенко назвал акцию «Бессмертный полк» идеей белорусов (<https://iz.ru/851761/2019-03-01/lu-kashenko-nazval-aktciiu-bessmertnyi-polk-ideei-belorusov>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/5/10 На странице одного из солдат «Бессмертного полка» появилось фото Гиммлера (<https://iz.ru/1009653/2020-05-10/na-stranitce-odnogo-iz-soldat-bessmertnogo-polka-poiavilos-foto-gimmlera>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/5/14a СК возбудил дело из-за фото нацистов на сайте «Бессмертного полка» (<https://iz.ru/1011005/2020-05-14/sk-vozbudil-delo-po-faktam-razmeshcheniia-foto-natcistov-na-saite-bessmertnogo-polka>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/5/14b Эксперт оценил реакцию россиян на провокацию в ходе акции «Бессмертный полк» (<https://iz.ru/1011173/2020-05-14/ekspert-otcenil-reaktciu-rossiiian-na-provokatciiu-v-khode-aktcii-bessmertnyi-polk>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/5/16 Обыски начались у четверых подозреваемых в провокации в ходе «Бессмертного полка» (<https://iz.ru/1011994/2020-05-16/obyski-nachalis-u-chetverykh-podozrevaemykh-v-provokatcii-v-khode-bessmertnogo-polka>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/5/28 Трои м фигурантам дела о реабилитации нацизма предъявлены обвинения (<https://iz.ru/1016898/2020-05-28/troim-figurantam-dela-o-reabilitacii-natcizma-prediaвлены-obvneniia>) 2021/1/27 最終閲覧
- 2020/7/27 Имя генерала Власова удалили с мемориала битвы за Москву в Дмитрове (<https://iz.ru/1040635/2020-07-27/imia-general-a-vlasova-udalili-s-memoriala-bitvy-za-moskvu-v-dmitrove>) 2021/1/27 最終閲覧

- 2022/5/9a Путин присоединился к шествию «Бессмертного полка» в Москве  
(<https://iz.ru/1332168/2022-05-09/putin-prisoedinilsia-k-shestviu-bessmertnogo-polka-v-moskve>)  
2022/9/19 最終閲覧
- 2022/5/9b «Полку» пришло: как памятная акция прошла в России и мире  
(<https://iz.ru/1332248/natalia-smirnova-roman-soldatov/polku-pribylo-kak-pamiatnaia-aktciia-proshla-v-rossii-i-mire>) 2022/9/19 最終閲覧
- Курилла, И.  
2018 «Бессмертный полк» «праздник со слезами на глазах» парад мертвецов или массовый протест: Споры о смысле и перспективах нового праздничного ритуала // *Контрапункт* 12: 1-11.
- Лазебная К. П.  
2016 Феномен ситуативной сплоченности – теоретический анализ и кейс-стади («Бессмертный полк») // *Практики сплоченность в современной россии*. Под ред. Н. Е. Покровского М.: Университетская книга. С. 199-230.
- Малахов, В.  
2018 Изобретение традиции как мем и как черта социокультурной реальности // *Неприкосновенный запас* 3: 236-245.
- Земцов, Н.  
Биография  
(<https://nzemtsov.ru/bio/>) 2022/11/9 最終閲覧
- Нисова, М. В.  
2015a Феноменон массовой гражданской инициативы в масс-медиа на базе исторического контекста // *Конференция Ломоносов* 205: 1.  
2015b Бессмертный полк родом из Томска факторы популярности. Проблемы массовой коммуникации // *Новые подходы*: 127-128.  
(<https://core.ac.uk/reader/287478280>) 2021/1/27 最終閲覧
- Правительство России, Консультант Плюс  
2014 Статья 354.1 УК РФ. Реабилитация нацизма  
([https://www.consultant.ru/document/cons\\_doc\\_LAW\\_10699/be763c1b6a1402144cabfe17a0e2d602d4bb7598/](https://www.consultant.ru/document/cons_doc_LAW_10699/be763c1b6a1402144cabfe17a0e2d602d4bb7598/))  
2021/1/27 最終閲覧
- Путин, В.  
2020/6/24 Военный парад, посвященный 75-й годовщине Победы в Великой Отечественной войне. Полное видео (<https://www.youtube.com/watch?v=GITgMVKlXxg&t=1811s>) 2021/1/27 最終閲覧
- Реут, О.  
2016 Послесловие к дню победы куда уйдет Бессмертный полк? // *Черника* (<https://mustoi.ru/posleslovie-k-dnyu-pobedy-kuda-ujdet-bessmertnyj-polka/>) 2021/1/27 最終閲覧
- РИА Новости  
2012 Вечный огонь в России и в мире: история традиции (<https://ria.ru/20120508/641924330.html>) 2021/1/27 最終  
閲覧
- Соколова, А. Д.  
2013 Трансформации похоронной обрядности у русских в XX-XXI веке: автореф. дис.... канд. ист. М.
- Юдина, А. Н.  
2016 Символическая природа и политический миф акции Бессмертный полк // *Тоталитаризм и тоталитарное сознание* 14: 86-89.